

第3回國際國民所得學會

山田雄三

國際國民所得學會(原名は International Association for Research in Income and Wealth)の第3回會議が9月1日から6日までローマの近郊カステルガンドルフォ Castelgandolfo で開かれた。この會議は隔年の開催で、前回パリーの近傍で開かれた會議には都留教授が出席したが、今回は森田教授と私とが出席した。ここに簡単に會議の様をお伝えしようと思う。*

ローマから東南へ、バスで約1時間ばかりのところの小高い丘陵地帯があり、2つの美しい湖水を圍んで避暑地になっている。この地帯には古城が散在していて、カステリと呼ばれているが、そのローマからとつきの町がカステルガンドルフォである。アルバノという湖水を見下ろし、ローマ法王の別荘のある町である。會場は町のずれのモンテクッコ院 Villa Montecuccio という僧院で、會議室にはキリストの像が飾られ、宿舎にあてられた部屋にも祈禱臺が具えられてあった。ここで1週間鑑詰めにされたわけである。

集ったものは約60名。半数は別に附近のホテルに分宿していたが、われわれは會場と同じ場所の1室をあてがわれ、ドイツの統計局長 Fürst と3人一緒の部屋であった。家族同伴の人も多く、晝と晩の食事はみんな集って僧院の地下の食堂でとるので、なかなか賑かである。會議は8月31日の晩餐から始まったが、Kuznets 教授が奥さんと令嬢2人を伴って席を占めているすぐ隣りにわれわれは坐らされ、そこで初對面の挨拶をしたのには、一寸まごついた。食事の始つた時、Gilbert が立って簡単に開會の挨拶を述べ、婦人の參列の多いのを讚美して皆を笑わせていた。

* この學會の刊行物としては *Income and Wealth* と題する叢書が3巻出ており、第1巻は Erik Lundberg 編で Cambridge で開催された第1回會議の主要報告を集めたもの。第2巻は *Income and Wealth of the United States* と題し、Simon Kuznets と Raymond Goldsmith の2つの論文を収録したもの。最近第3巻が出たが、これは Milton Gilbert の編で第2回會議の主要報告を集めたもの。その第二論文に Shigeto Tsuru and Kazushi Ohkawa: Long-term Changes in the National Products of Japan since 1875 が収録されている。また各國にアクティヴ・コレスポンドントをおき、國民所得に関する文獻目録を集め、これは *Bibliography on Income and Wealth* と題して、第1巻(1937—47)及び第2巻(1948—49)の2冊が出版されている。

その翌朝から報告會。會議は午前(9時から)と午後(3時から)とに分かれ、それぞれ中間に30分くらいづつお茶の時間があった。報告者は豫め報告書を配布しておき、その要旨だけを報告する。報告者の数はセッションによっていろいろ差があり、報告時間は10分とか15分とかに制限された。質問及び討議を行うものは報告中に司會者に氏名を申出て、司會者の指名によって立ちあがる。セッションは8つにわかれ、報告は全部で34あった。用語は大部分英語、二三フランス語のものがあった。以下報告の行われた順序に従って會議の様子を述べよう。

9月1日午前。イタリーの國民所得研究に関する報告4つで、Gilbert が司會者。

- (1) Benedetto Barberi (イタリー-統計局長): Introduction to the Session on Italian Research in Income and Wealth.
- (2) Benedetto Barberi: The Government in the System of Social Accounts.
- (3) Antonio Giannone (イタリー-統計局): Italian Research in Wealth and Income.
- (4) Alessendo Castanzo (イタリー-統計局): On the Consumption Elasticity.

(1)及び(3)はイタリーにおける國民所得及び國富研究の歴史を述べたもの。(2)は最近イタリーでも social accounts を中心に研究が進められていることについての報告。(3)は家計調査にもとづく各支出項目の消費弾力性の計算。これらの報告に對して Stone, Fürst, Gilbert, Goldsmith などからの發言あり、とくに所得や social accounts の規定についてイタリー特有のものがあるかどうかというような點が論議の中心であった。

9月1日午後。未開發國の national accounts に関する報告5つで、Barberi が司會者。

- (1) M. Mukherjee (印度): The Technique of Social Accounting in a Pre-Industrial Economy.
- (2) R. Bicanic (ユーゴスラヴィア): Some Problems of Sectors in the Social Accountings of Different Economic Systems.
- (3) Morris A. Copeland (アメリカ, コーネル大學): Adapting Social Accounts to Mainly Nonmoney

Economics.

(4) A. R. Prest (ケムブリッジ): The National Income of Nigeria, 1950—51. Ch. I. Principle and Purpose of Estimation.

(5) Everett E. Hagen (在ビルマ, 缺席のため Giannone が代讀): Social Accounts and Incremental Capital-output Ratio in Underdeveloped Countries.

ここで未開發國の問題として主としてとりあげられた論點は非貨幣的セクターをどう處置するか、ということであった。ただし(2)はソ連やユーゴの社會主義體制を別のタイプとして併せてとりあげた。(5)は capital output ratio について人口や資源に関する標識をとりいれる必要を論じたもの。これらの報告に對し, Marczewski, Miss Dean, Sastry, Stone, Gaathon などから發言あり, 貨幣的セクターと非貨幣的セクターとが本質的に分類し得るかどうかという點などが論議された。

9月2日午前。モデル・ビルディングに関する報告3つで, Copeland が司會者。

(1) Richard Stone (ケムブリッジ): Model Building and the Social Accounts.

(2) Ragnar Frisch (オスロー): From National Accounts to Macro-Economic Decision Models.

(3) Schouten and Lips (オランダ統計局): National Accounts and Policy Model.

このセッションは會議中最も理論的であった。(1)は最近二十年間のモデル・ビルディングの發展を概観したものの, 報告書には148の文獻が列挙されてある。(2)は政策的ツールとしてのモデルの適用を強調し, とくに厚生經濟學におけるパレート命題の吟味を中心として, 極大原理と與件との關係から degree of freedom の處置を考察したもの。Frischはこの報告の附録として別に“On Welfare Theory and Pareto Regions”というメモランダムを提出している。(3)は國民所得勘定について統制部分と統制外部分とを分け, 厚生經濟學的なポリシー・モデルの構成を試みたもの。これらの報告に對して Struve, Kuznets, Jackson, Perroux その他二三の人々から厚生の考え方などについて活潑な討議があつた。

9月2日午後。ビジネス・ミーティングとして會長 Gilbert による事業報告があつた。理事としては Kuznets, Stone, Gilbert の三人が留任, 新に Barbeli, Bjerke などが選ばれた。次回は1955年コペンハーゲンで開催。テーマとしては social accounts と economic planning との關係, ソ連の國民所得などとりあぐべしとの提案があつた。また刊行物などに関して意見が交換された。

9月3日午前。經濟成長率に関する報告7つで, Kuznets が司會者。

(1) J. B. Jefferys and D. Walters (イギリス, ナショナル・インスティテュート): National Income and Expenditure of the United Kingdom, 1870—1952.

(2) (3) C. Gruson, G. Th. Guilbard, J. Mayer, F. J. Perroux (フランス, 報告は Perroux と Mayer と二人): Aspects de la Croissance Economique en France.

(4) R. Jostock (ドイツ, ヴュルテムベルグ州統計局): The Long-term Growth of National Income in Germany.

(5) K. Bjerke (デンマーク統計局): Preliminary Estimates of Danish National Product for 1870—1950.

(6) Y. Yamada: Notes on the Income Growth and the Rate of Saving in Japan.

(7) P. Bierve (ノールウェー統計局): National Income for Norway, 1900—1950.

これらは各國における國民所得の長期觀察の成果を持寄つたもの, 單に成長率の算定にとどまらず, 消費・貯蓄・閑暇等々それぞれ細かい點の計算も併せて含まれ, (5)の報告書の如きは非常に詳しいものであつた。質問者は Goldsmith, Fürst, Winkler など, 成長率の把握の奥に歴史的構造の變遷をとりいれねばならぬことや成長率と政策との關係が論議された。私の報告は一橋經濟研究所の協力により日本の成長率及び貯蓄率の計算を survey したものだつたが, Goldsmith が私の Colin Clark 批判に賛成の發言をした。時間の關係で Clark はその日は何も發言しなかつた。

9月3日午後はエクスカーション。二臺の觀光バスに分乗して, 葡萄園を見學し, それから山を登ってネミ湖に到り, さらにゲンアノ町の醸造所を見學した。歸りのバスでは葡萄酒で上機嫌の先生連, つれの家族と一緒に盛んに合唱の聲を張りあげて大はしやぎであつた。

9月4日午前。國際比較に関する報告二つで, 司會者は Saunders.

(1) Milton Gilbert (O. E. E. C.): Empirical Problems in International Comparisons of National Products and the International Purchasing Power of Currencies: A Study of the United States, the United Kingdom, France, Germany and Italy.

(2) S. Adler and D. Paige (イギリス): International Comparisons of National Product: An approach by Industry of Origin.

(1)は米・英・佛・獨・伊五ヶ國の國際比較をなした大

部の報告であって、その根本方法は Colin Clark の国際単位の方法と似ているが、単に生計費の加重のみでなく、もっと擴張された観点から産出高の比較を試みている。(2) は国際比較について消費支出の面と並んで産業收支の関係をとり入るべきを論じたもの。質問討議は Colin Clark, Shirras, Frisch, Geary など多くの人々によってなされ、国際比較上の共通物のとり方や制度的な比較の必要などが論じられていた。この日の質問討議は前日の各国成長率の問題も含んで行われ、Colin Clark は日本のことに言及し、日本の成長率を高く計算した根拠について辯解していた。さらに Shirras は質問のなかで私の前日の数字をあげ、1938—42 年の貯蓄率が高い理由を尋ねたので、これに対しては發言の順を待って答えておいた。

9 月 4 日午後。時間的比較についての報告。Geary が司會者。

(1) H. Bartels (ドイツ・統計局): National Product at Constant Prices, Problems and Methods.

(2) J. Nicholson (イギリス): Problem in the Measurement of Real Income.

この二つの報告は基準や加重について簡単に通常の問題を指摘したものだったが、これに對し多数の人々から發言があった。この午後には引き續いて資本勘定のセッションにはいり、そのうち次の三つだけの報告があった。

(1) G. Fürst: Methods of Estimation of Items in the Capital Account of the Federal German Republic.

(2) K. Bjerke (デンマーク, 統計局): Items in the Danish Capital Account with Special Reference to Depreciation.

(3) O. Hiorth (ノールウェー, 統計局): Methods of Estimation of Items in the Capital Account of Norway.

各国それぞれの資本勘定の處置方法についての報告を持ち寄ったものであるが、豫め Geary から質問事項として、固定資本の處置について 8 項、在庫品の處置について 5 項、減價銷却について 5 項、個人貯蓄について 2 項、會社貯蓄について 3 項が提出されていたのに對し、報告者は各国の實狀を紹介した。

9 月 5 日午前。資本勘定の續き、Marczewski が司會。

(4) C. T. Saunders (イギリス, 統計局): Method of Estimation of Items in the Capital Account of the United Kingdom.

(5) F. Closon (フランス, アンステイチュート・ナショナル): La Evaluations de Capital National in France.

(6) R. C. Geary and T. P. Linehan (アイルランド): Method of Estimation of Items in the Capital Accounts of Ireland.

これらについては報告者の間にも討議あり、Gilbert, Stone, Winkler, Sastory, Shirras 等々からの發言があった。

9 月 5 日午後。その他というセッションであるが、主として national accounts に關しての報告で、Barberi が司會。

(1) G. Stuvell (オランダ): The Use of National Account in Economic Analysis.

(2) J. Marzewski (フランス, Caer 大學): The Role of National Accounts in the Planned Economies of the Soviet Type.

(5) E. F. Jackson (國際連合, 歐洲經濟委員會): Social Accounting in Eastern Europe.

(4) Raymond Goldsmith (アメリカ, ナショナル・ビュロー): The National Balance Sheet of the United States of America.

これらの報告のうち、Marczewski が資本主義と社會主義とを對立せしめ、一方資本主義では input-output とか social accounts とかいう問題によつて多分に社會主義的になり、他方ソ連においては貨幣問題がとり入れられて、兩方からの歩み寄りが見られると述べていたのは私には甚だ印象的だつた。

報告が終つて、Gilbert が立ち、今回の會場の世話役 Barberi に感謝の辭を述べ、これに對し Barberi の挨拶があった。午後の報告會は少し早目に切りあげ、法王の別荘で信者謁見があるというので、一同揃つて見物に出掛けた。5 日の晚餐は最後のもので、ここで Miss Deane 始め會合の世話をされた若い婦人達に拍手を以て感謝の意を表した。翌朝 9 時一同バスに乗ってローマに向つた。

以上がこん度の會議の大體のあらましである。何しろ報告書だけでも大版のプリントで積んで 20 センチぐらゐもあり、まだまで十分に消化していない。目ぼしいものだけでも早速読み返えそうと思っている。終りに森田教授が何かと力添えしてくれたことは感謝に耐えない。また私の報告の準備にあたっては都留教授始め經濟研究所の多くの人々の助言を受けたことをここに改めて感謝しなければならない。私の報告は書き直して近い機會に "Annals" (一橋大學英文紀要) に掲載する豫定である。